WEB探偵 昂

七瀬 晶

目次

炎上	5
スパムの恋人	107
魔女狩り	227

炎

上

1

高原健は、コンピュータの画面を前にして考えこんでいた。いつからだだったか、もう長いことそうしていた。

表示されているのは、黒い背景のホームページだ。

『ウェブの穴』と、赤いおどろおどろしいフォントで書かれ、どういうわけか**罫**マーカーで記されている。

その下には、白い文字で、サイトの説明文。

ネットで受けた被害に、どうしても泣き寝入りしたくないあなたへ。

私たち裁き人が、あなたに代わって恨みを晴らします。

報酬は、依頼内容と、あなたの懐具合に応じて相談にのります。

依頼を受ける、受けないに関わらず、相談の内容は、秘密厳守します。

〜ルール〜

- ・嘘をつかない
- ・隠しごとをしない
- ・約束を守る

上記ルールのひとつでも破れば、あなたも裁きを受ける対象になることを忘れずに。

同意できる方は、こちらからどうぞ。

「こちらから」の部分は、ボタンになっていた。

ポインタをさんざんさまよわせたあげく、健はボタンを押した。

ボタンをクリックするだけで、こちらの情報が抜かれるという噂もある。構うものかと思っ

た。

送信用のフォームが現れた。

連絡用のメールアドレス、相談内容を書く欄がある。

判断にあたって、よりくわしい内容をうかがう場合があります、と注意書きがあった。

依頼内容を書きこみ、送信ボタンを押した。

五分とたたぬうちに、返事が返ってきた。

メールまたはチャットで、よりくわしい内容を聞かせてほしいと書かれていた。

チャットは、インターネット上で音声またはキーボードから入力する文字を使い、リアルタイムに情報をやりとりする手段だ。

健は文字チャットを選び、希望の日時を指定した。

炎

2

外へ出ると、初夏のまぶしい日差しが肌を射た。

条件反射的に汗がだらだらと噴き出してくる。

ハローワークに行くつもりだったのに、歩き出すと動悸が激しく、まるで長い坂道をマラソンしているような具合である。

人とすれ違うたびに、全身の筋肉がぎゅっと硬くなるのが分かった。

——見ろよ、あのきもでぶオタ。

——わ、きんもーいつ、あいつが……

どうかしている。

薬局へ向かい、精神安定剤とポカリスエットを買って、薬を喉に流しこんだ。

ますます負け犬のような気がして嫌気がさした。しよせん薬のできることといったら、精神を鈍らせて身体症状を押さえるだけなのだ。根本的な問題を解決するわけではなく、切れればまた同じことの繰り返しである。

だが今は、この息苦しさだけでもなんとかしたい。

ハローワークに行くのは、とても無理そうだった。

公園へ向かい、ベンチに腰を下ろした。

こうして座っていても、誰かに見られているのではないか、どこから携帯電話のカメラが自分に向けられているのでは、と、つい辺りを見まわしてしまう。

公園には、やはりニート風な男がぼんやりと座っているぐらいで、人影はない。

上

何もしていないと、思考がどんどんネガティブな方向に向いていく。ゲームでもして気を紛らわせようと、ポケットから携帯電話を取りだし、iモードを立ち上げた瞬間、指が勝手にあるURLを押し始めた。

——やめる。やめるんだ。

震える指で切断ボタンを押し、どうにかこうにか携帯を背広の胸ポケットに押しこんだ。頭の中で、ふたたび声がささやきはじめる。

——かわいそー、まだ仕事見つからないの。

——きもおた、でぶ、おかまの上にニートでひつきーかよ。救いようがないな。

嫌なもの、恐ろしいものに自分から執着してしまう……強迫症、というんだっただ。どうしても再悪の想像を止めることができない。

今の自分はどこにも逃げ場がない。

こんなはずではなかった。

炎

つい二ヶ月前まで、会社では地道に無難に仕事を終え、ネットでは第二の人生を楽しんでいた。

毒舌と自作フラッシュ——ネットで流すちよつとしたアニメーション——が売りの、『パイシー池田のブログ』は、インターネットではそこそこ知られた人気サイトだった。

芸能人から無名の個人まで、政治家から社会的弱者まで、誰かれ構わず過激にこきおろす彼に、反発する者もいたが、それを痛快に感じてか固定ファンも多かった。書き手が女性であることも興味をひいたようだ。

ネット上での彼は、池田のり子という架空の人物だった。プロフィールの写真は、街中で撮影したショートヘアの女性を適当に加工して、シルエットだけにしたものだ。

あえて女っぽい文章にしたことはない。女にしたのは、ちよつとふざけてみただけで、実のところ名前や性別などどうでもよかった。

重要なのは、ネットと現実が分離していたということだ。

普段はおとなしい人がハンドルを握ったとたん荒っぽくなるように、会社では目立たないネット管理者だった高原健は、ネットでは言いたい放題暴言を吐く「スパイシー池田」に变身した。車の硬いボディが守ってくれる限り、高原は安全のはずだった。

ところが、荒っぽい連中に車を止められ、窓ガラスを叩き割られ、車の外に裸で引きずり

だされたのである。

まず最初に社名が、本名がばらされ、続いて顔写真が、自宅の住所が、インターネットであらゆる人の目にさらされた。

——ネカマだったんだ。

——ププ、この顔で他人のことキモイとか言ってたわけ？

ブログでの罵倒や書きこみは次第にエスカレートし、舞台が匿名掲示板である『2ちゃんねる』に移ると、俗に『祭り』と呼ばれる状態に移行した。

匿名による悪意ある書き込みが、彼のプライドを叩きつぶし、私生活を打ち砕いた。

家の写真がアップロードされ、職場に無言電話がかかってくるに及んで、高原はノイローゼになりかけていた。

しまいには、会社の上司あてにこんなメールまで届いた。

——おたくの社員、業務時間中に日記書いているようですが、いいんですか？ 給料泥棒ですよね。

——他人を誹謗中傷するような内容です。会社のイメージ、ダウンしてますよ？

上司に呼びだされて事情を聞かれたが、会社を辞めろという話はなかった。ただ、ネットに接続することは控え、これ以上刺激しないようにしろと注意されただけだった。

その時点で、引き返すこともできたのかもしれない。私生活を暴かれ、辱めを受けたとしても、バカ騒ぎは永久に続くわけではない。

だが、できなかった。

高原は何かに憑かれたようにネットに接続し続けた。

十分おき、五分おき、いや、一分おき……

自分の噂が書きこまれていないかチェックを続け、悪意ある書きこみを見るたび、手が震え、息が苦しくなった。

恥ずかしさと怒りと恐怖とで思考が空回りし、仕事など手がつかなくなった。

そして、彼は職を失った――

ネットでも現実の世界でも居場所をなくした彼は、ネットと現実のはざまにただ一人浮遊していた。

周りの人間はすべて敵に見えた。といって、家に閉じこもって自己の内側を見つめれば、

怒りと憎しみだけがふつふつと渦巻き、増殖していった。

このままではいけないと感じるだけの理性はまだ残っていた。

だが、今までのことを忘れようと努め、新しい仕事を見つけようと空しい努力を続けるうち、結局この怒りのぶつける先を見つけないことには、今より先一步も進めないことに高原は気づいたのだった。

誰が高原をここまで追いこんだのか。犯人はネットの不特定多数だ。だが、最初に池田Ⅱ高原とつきとめた誰かがいる。写真をアップロードできる人間も限られている。

個人情報公開し、悪意に満ちた『祭り』のきっかけを作った人間は、実は高原の近くに

いるのではあるまいか。犯人をつきとめたいと思ったものの、個人でできることは限られていた。目的が復讐である以上、警察に相談するわけにもいかない。そもそも、この程度のこと警察は容易に動いてくれない。

そうしてたどり着いたサイトが、『ウェブの穴』だった。

犯人を知ろうと、復讐しようとして、なんの意味もないことは分かっている。だが、そのことよって今の息苦しさを、いや、生き苦しさも少しでも解消できるのなら、そこから新しい第一歩がスタートできるのなら、高原はどんな犠牲でも払うつもりだった。

公園を出ようとすると高原の後から、一人の女がやってきた。

サングラスをかけ、暖かい陽気にも関わらず、薄いスプリングコートを着ている。目つきはよく見えないが、ほっそりした顎や口元を見る限り、なかなかの美人のようだ。

高原は気づかずに歩き続け、駅の近くへやってきた。

コーヒーショップの入り口に置かれた求人誌を手に取り、そのまま中へ入る。

女も続いて中に入った。

高原がコーヒーの注文を終え、自分が注文する段になって、さすがにまずいと思ったのか、女はサングラスを外した。

女は伏し目がちにカフェ・ラテを注文し、店の隅に陣取った高原から少し離れて、腰を下ろした。

高原は求人誌をばらばらとめくっていたが、集中できなかつたようだ。心ここにあらずという風で、時々思いついたように携帯を取り出しては操作しかけ、またしまい、を繰り返している。

上

女はちらちらと高原を観察していたが、少しすると携帯に着信があつたようで、手元でメールを打ち始めた。

しばらくして女が顔をあげた時、高原の姿は見えなくなっていた。

女はあわてたように立ち上がり、後を追った。

トイレを片づけ、入り口へ走り出たところで、ちょうど店へやってきた背広姿の男と鉢合わせになった。

「ごめんさー」

男は軽く会釈して、あわただしく去っていく女の後ろ姿を見送った。

店内に目を戻すと、トイレに入った高原が席に戻ってきたところだった。

飲み残しのコーヒーをそのまま返却口に戻し、男の脇をすり抜けて外へ出ていく。

男は後を追おうとしたが、結局やめて店の中へ入り、うつむき加減に窓の外を歩いていく高原を見送った。

炎

「ありや、どこからどう見てもオタクだわな」

歯に衣着せぬ感想を述べ、それからふと鋭い目つきになり、首を傾げてつぶやいた。

「でもまあ、アレよりはマシか。出回ってるのよりは」

コーヒーを注文して席に着くと、男は携帯電話を取り出してどこかにかけた。

ワンコールですぐに女の声が出た。

「どう？」

と、最初の一声はそれだけだった。

名前も名乗らず、相手の名も確認しない。

だが、たった一言でも、声は人にさまざまなイメージを喚起させる。

美人声というものがあるならば、女の声はまさにそれだった。

色気はあるが、媚びた風ではなく、落ち着いているが、華やかさのある声。

「一応、住所も写真も一通り間違いなさそう。ちよつと気になることがあったんだが……

見失っちゃった」

「あら、めずらしいわね。ヤッさんがターゲットを逃すなんて」

「いや、星じゃなくてね。後を尾^つけてきてた女だ」

「女？ 探偵かしら、それとも警察」

「いや、どう見ても素人だな。いくらなんでもサングラスをかけて店の中に入ってくるプロはいねえよ」

電話の向こうの女が声をたてて笑った。

愉快げな、それでいて品を失わない笑い声だった。

上

「2ちゃんねる中毒の一人かもしれないが、こうなるとストーカーの線もありうるな。あんな美人がストーカーとは思いたくねえが」

「あら、美人だったの」

「ちよつと暗い感じだが悪くはないな。結構男受けするんじゃないか」

「写真は撮った？」

「いや。どうも文明の利器は苦手でねえ。この年になると、携帯で電話するだけで精一杯だわ。似顔絵なら描いてもいいけどね」

「お願いするわ。もう事務所に戻ってくる？」

「もう少ししたらな。レースの結果が気になっちゃって」

「まあ、元警察官が競馬とは呆れた話ね」

女は言ったが、言葉ほど呆れても怒ってもいる様子はなかった。

「ま、いいわ。こっちはこつちで捜査を続けてみる。じゃあまたね」

電話が切れた。

男はコーヒーを飲み干すと、うれしそうに伸びをしてコーヒーショップを出て行った。

炎

高原は、自宅のパソコンの前に腰を下ろし、インスタント・メッセージの画面を覗きこんでいた。

裁き人、と表示されたチャットの相手は、どうやら恐ろしくタイピングが速いらしい。通信経路によるタイムラグはあるものの、長文がたて続けに表示される。

連絡手段に文字チャットを選んだ高原も、タイピングにはそこそこ自信があったが、相手はさらに速く正確である。

画面に、相手の文章が現れた。

「つまり、プライバシーを暴かれたことで、精神的にダメージを受け、実生活にも被害が及んでいる、と。」

——はい。

「それで、あなたの住所や名前を暴露した犯人を特定してほしいということですね。」

——はい。

「犯人が分かったら、どうしますか。」

高原はしばし返答を迷った。

相手をめつた刺しにする自分が脳裏に浮かんだ。

正体のない相手を、空想の中で幾度となく殺してきた。相手は男になり、女になり、子供になり、年寄りになった。

だが、空想と現実とは違う。

——分かりません。

高原は素直に書いた。

炎

上

——本当をいえば殺してやりたいぐらいですけど。

「私たちは、殺しは請け負っていません。」

冷静な返答に、高原は思わず笑いをもらした。

俺はまだそこまで狂ってはいない。相手の家に入り込んで、息の根を止めるほどには。たぶん、まだ。

「恨みを晴らす方法ならほかにいろいろありますが。」

——まずは誰がどんな動機でやったのか知りたいです。どうするかはそれからです。

「ではとりあえず、犯人を特定し、ご報告を行うことにします。最低限の調査費用として六〇万いただきます。追加費用が必要になる場合は別途ご連絡します。」

高原はじっとチャットの画面を見つめた。

決して小さな額でない。だまされようとしているのではないか。だが——
しばらく返事をしないでいると、相手が催促してきた。

「なにか問題がありますか？」

——いえ。

「では、前金として二〇万振込みお願いします。」

——あの。

「はい？」

——犯人が分からなかった場合は……？

「全額返金いたします。」

——分かりました。

「よろしいですか？」

「それでは、口座番号は……」

高原は腹を決めた。

港まで来た以上、船に乗り込んでみるしかないのだ。行き先は分からなくとも。チャットのログを保存し、念のため手元にも番号をメモした。

炎

「いくつか確認させてください。」

「犯人に心当たりはありますか。たとえば、あなたとブログの関係を知っていた人物、写真を手に入れられる人物は。」

——ブログのことは誰にも話していません。住所が公開されてしまえば、写真は誰でも撮れると思います。

「あなたに恨みを持っている人物がいますか？」

「身の回りでは思い当たりませんが、ネットなら大勢いると思います。いろいろなサイトを批判してましたから。」

「ブログでは、かなり過激な発言をされていたようですね。」

「あまりヤバそうなのは、いくらか消しました。」

「完全に消してしまいましたか。取ってありませんか？」

「すいません、取ってないです。」

「そうだ、アクセスログは残ってます。犯人のIPアドレスが残ってるかもしれません。ブログにアクセス解析ツールを入れてたので。」

「送っていただけますか？」

「はい。上司宛てに来たメールもあるので、一緒に転送します。」

メールを送信すると、高原はふと思いついて尋ねた。

「犯人が、見つかった後の話ですが。」

「はい。」

「相手にも同じことをしてやることはできますか？」

「もちろんです。」

即答だった。

高原は信じられない思いで、画面を見つめていた。

たしかに相手の本名や住所が分かれば、情報を晒すことは可能だ。

彼らの手にかかれれば、悪評をたてることすら可能なのかもしれない。しばらくして次のメッセージが現れた。

「ただし、私どもが実行する場合は、別料金をいただきます。」

見えない相手は、どこまでもビジネスに徹しているようだった。

炎

上

「絵、うまいですね」

似顔絵を覗きこんでいた若い女の子が感心したように言った。
褒められた男が、照れ笑いを浮かべた。

「だてに十年も似顔絵描いてないよ」

「えっ ヤッさん、警察の仕事のかたわら絵描き屋さんまで！」

「まさか。ほら、人相書きつてやつだよ」

「刑事さんが絵を描くんですか？ プロに頼むんだと思ってました」

「自慢じゃないけどモニタージュよりの中率いいよ、俺の絵のほうが」

「へえ、今度私の顔も書いてくださいよ」

机を囲む二人の隣に立っていた別の女性が、つと指を伸ばしてテーブルの上の紙を取り上げた。

画用紙には、喫茶店で高原を尾けていた女の顔が描かれていた。

薄い唇に小ぢんまりした鼻、一重の少し影のある目つきが、鉛筆デッサンで見事に表現されている。

「たしかにそこそこ美人ね」

男の相手をしていた電話の声だ。

「あんたほどじゃないけどな」

ヤッさんと呼ばれた男がおだてると、女の子が調子を合わせる。

「昴さんは、そこそこじゃなくて、本物の美女ですもんねえ」

「あなた達、おだてても何も出ないわよ。どこかで見た気がするけど、気のせいかしら……」

昴と呼ばれた女性は、手にしていたペンでコツコツと額を叩いた。

考えこむように眉根に皺を寄せた様子もサマになるから、美人は得である。

「ま、いいわ。ヤッさん。その女が現れるかどうか、また尾行を続けてみて。私はネットと会社を洗ってみる」

「了解。俺みたいな化石は脚で稼ぐしかねえからな。頭脳労働はハッカーに任せるよ」

「あら。尾行だつて知能がいるし、ターゲットと接触するのも立派なハッキングよ。会社には直接行ってみるつもり。じゃあ頼むわね」

きびきびと歩き去っていく昴を見送って、女の子はため息をついた。

「かっこいいなあ。あこがれちゃう」

「愛ちゃんもじゅうぶん可愛いよ」

からかうように言われて、愛——若佐愛はむくれてみせた。

「そういうことじゃないですよ。ああ、私も一人前の〈裁き人〉になれる日が来るのかな」

「物騒だな。捜査員だろう」

「ホームページに〈裁き人〉って、書いてあるじゃないですか」

「ホームページの〈ひとつ〉にはな。さてと、俺も出かけるか。なんだったら、愛ちゃんも一緒に出るかい」

愛は顔を輝かせた。

「えっ、いいんですか?」

「まあ危険なこともないだろうしな。足だけは引っ張るなよ」

ヤッさんは、ごつい顔に似合わず案外器用にウインクすると、ジャケットを羽織って外へ出た。

6

はて、こんな女性と会ったことがあっただろうか?

疑問に思いながら、浅田みちはる通晴は椅子を勧める仕草をして自らも腰を下ろした。

株式会社エス・ビー・エム

セールスエンジニア

柴沢 恵

受け取った名刺にはそう書かれている。

システム管理者である浅田のところによってくるセールスマンは少なくない。

一応飛び込みはお断りしているが、出入りしているなじみの業者以外にも、展示会で名刺を交換した相手がやってくることもある。

名刺を交換した相手などいちいち覚えていないが、これだけの美女なら話は別だ。

コンパニオン並みにすらりと伸びた足、キャリア・ウーマンらしい控えめなメイクと知性を感じさせる表情。ベージュのスーツがよく似合っている。

社名にも覚えはない。

きつとどこかでアンケートでも書いたのだろう、と、浅田は自分を納得させた。

展示会の景品景品欲しさに答えたアンケートを、いちいち覚えていたりほしくない。

興味のないものにアンケートを書くのもどうかと思うが、夏の暑い時期に、広い展示会場をうろつき回った後など、ペットボトル入りのミネラル・ウォーターが、さながら砂漠の中のオアシスに見えるものだ。

「本日は、お忙しいところどうもありがとうございます」
柴沢が資料を取り出した。

パワーポイント資料を白黒コピーしただけの簡素なものだ。

「弊社は三年前からセキュリティを専門に仕事しております……」

三年前。

黒星がひとつついた。

新しいことは悪いことではないが、いつまで続くかが問題だ。システムを任せた会社が倒産でもすれば大変なことになる。

「会社案内とか、ないんですか」

「すみません、まだ十名程度の小さな会社です」

二つ目の黒星。

そんな会社にセキュリティを任せるなど、上がとてもうんとは言わないだろう。

まあ、話を聞いてみるだけ聞いてみるでもいい。情報収集はしておくものだ。

セキュリティ診断サービスや総合的なセキュリティ・コンサル、提携しているベンダの製品紹介などを一通り説明した後、柴沢がこうもちかけてきた。

「ただいま無料でセキュリティの簡易診断サービスを行っております。御社もいかがです

か」

「まあうちは、一通りのことはやってるつもりだからねえ」

「皆さんそうおっしゃいますが、どうしても漏れが出てくるものです。失礼ですが、最近、御社の社員の方がネットで話題になっていましたよね」

浅田の眉がびくりと動いた。

何を言っているかはすぐに察しがついた。高原健のことだ。

「あれはあくまで一社員の話ですから」

「でも、ああいう風にネットが悪評を広められると、お困りでしょう。社員が行き過ぎた行為をしないようシステムでアクセス制限をしたり、監視をしたりする必要があるかと思えますが」

「監視はちゃんとしてますよ」

浅田は言い返した。

「彼には何度も警告したんですが、なかなかやめないものでああいふことになりましたね。アクセス制限ソフトも入れてます」

「P2Pソフト、たとえばWindowsなどに感染するウイルスで情報が漏洩してしまうケースも少なくありません。ウイルス検出ツールだけでは引つかからないものもあるので、私た

ちは……」

「ウイニーの通信は半年前から遮断してます」

「ウイニー以外にもP2Pソフトは増えています。それに変異していく新しいタイプの新しいウイルスが……」

「モジュール型のウイルスでしょう。M_マa_ブのラビットガールみたいな。対策は打っていますよ」

マブはウイニーと互換性のあるフリーのP2Pソフトだ。ウイニーより操作性がよく安全だというのが、最近パワーユーザーを中心にじわじわと増えつつあるが、ラビットガールのようにマブを狙ったワームも出てきている。

「じゃあ、高原さんが、御社の社員だということはどこから漏れたんでしょう」

女はどうとうずばり名前をあげた。

「社内からどこかのホームページにアクセスすれば、ログにIPアドレスが残るでしょう。ホスト名から、社名はすぐに分かりますよ」

「社員の名前や自宅の住所まで分かりますか。社員名簿が流れたのでは？」

「さあ、それは……自宅のパソコンから会社宛てのメールが漏洩したのかも……」

「きつとそうでしょう。実は、情報漏洩のほとんどは、社員が自宅のパソコンに仕事を持ち

帰ることで起こっているんです」

浅田はだんだん腹が立つてきた。

いたずらに不安を煽り、サービスや製品を押しつけようとする。これでは古いや宗教団体と変わらないではないか。

こつちがまるきりの素人だとも思ってるんだらうか。

「うちも手をこまねいているわけではないですよ。あの事件があったので、システムポリシーを改訂しています。今ではファイルの持ち出しは禁止していますし、検疫ソリューションも導入しています。端末監視ツールも順次導入を進めているところですよ。異常なトラフィックには検知ツールから警告アラートが出来ますし、私自らSQLを叩いてチェックして、ルーティングルールの変更もします。もう二度と漏洩なんか起きるわけがないですよ」

浅田は簡単な専門用語をまくしたててみせた。

どうも業務の片手間にシステム管理をしているだけの何も分からない人間だと思われるようだ。自分のレベルを知らしめるには、専門用語を使ってみせるのが一番である。

「そういうわけで、今のところ、お願いすることはいいですよ。まあ、また何か新しいサービスができたら知らせてくださいよ。メールでも」

浅田はわざとらしく腕時計を見て腰を浮かせた。

「すみません、そろそろ次の予定が入ってまして……」
「分かりました」

柴沢は案外素直に荷物をまとめて立ち上がった。
出口まで送っていかうとすると、

「あのう、まったくの個人的興味なんですけど」

恥ずかしげに言って、顔を寄せてくる。

生意気な女だと思ったが、こうしてみると可愛らしいところもある。

「高原さんでどんな方でした？」

答える必要はなかったが、つい答えたくなつたのは、女の求める情報を知っているという優越感からだつたかもしれない。

「うーん……ま、ネットとは違って静かで目立たない社員でしたよ。人間よりコンピュータを相手にしているほうが好きっていうか。まあオタクですよ。僕も人のこと言えないけど」

柴沢は無難な答え方をした。

できる限り客観的な意見を伝えたつもりだつた。

「じゃあ、会社の中では恨まれたりはしてなかったんですね」

「益もないけど、害もないですからね」

事実だつた。少なくとも、会社の仕事ぶりや人づきあいに限っていえば。

「そんな人が会社を辞めることにまでなるなんて、なんだか気の毒ですね」

「でも当然でしょう。三分おきにネットにアクセスして仕事と関係ない書き込みしてたんだから……」

「ぜんぶ本人の書き込みだったんですか？」

驚いたような顔をしている柴沢に、浅田はうなずいた。

自分だけしか知らない情報を話してやるのはいい気分だ。

「2ちゃんねるで本人が降臨したって噂になってましたけど、てっきり他の人が便乗しているのかと」

「ほとんど本物ですよ。ログを見てたのは僕なんだから。それにね、あんな風になったのは、やっぱり本人に問題があると思いますよ」

「問題？」

「たんに名前や写真が漏れたから叩かれたんじゃないやなくて、それまでにいろんな人の恨みを買ってたから叩かれたわけでしょう。自業自得ですよ」

「そうかもしれないね……」

女は考え深げにうなずいた。

「でも、言葉の力って恐いですね。高原さんが思いつめて自殺でもしたら誰が責任取るんでしょう」

浅田はぎよつとして柴沢を見た。

柴沢は、あ、と言って立ち止まった。

「これ、弊社が無料でお配りしているセキュリティ診断ツールです。よろしかったら」
バッグからCD-ROMを取り出して渡す。

ちようどエレベータの前までやってきていた。

「ありがとうございます。お時間とらせてすみませんでした。それではまた」
柴沢は頭を下げると、エレベータの向こうに消えていった。

7

「どうなってやがる」

ヤッさんこと、安澤正仁やすざわ せいじんは、悪態をついた。

高原を張って三日目、ふたたび女が現れた。そこまでは筋書き通りだったが、今度の女は

前と違っていたのである。

ショート・ヘアで、目のくりつとした明るい感じの女性だ。人をこそそ尾けまわすようなタイプには見えない。

「あの人、ああ見えて、実はモテモテなんですかねえ」

助手席にいた若佐愛が首をかしげる。

「阿呆、そんなわけないだろ。あんな生つちよろいデブがもてるなら、俺なんか……」

「奥さんに逃げられることもなかった、ですか？」

「余計なお世話だ」

ぎよろりと睨みをきかされて、若佐は首をすくめた。元警官だけあって、無言の威圧感がある。

二人は高原のマンションから少し離れた道端に車を停めていた。

女はマンションの外で茂みの影にしゃがみこんで、高原の部屋のほうをちらちら窺っている。高原からは見えないかもしれないが、こちらから見ると怪しいことこのうえない。

安澤は懐からマイルドセブンを取り出した。

露骨に眉をひそめる若佐に言い訳するように、

「吸わねえよ。なんかくわえてないと落ち着かないんだよ。こういう長丁場は」

言いながら煙草を一本口にくわえる。

「しかしなんだ、ネットかなにかで高原尾行ごっこでも流行ってるのかね」

「あ、その線あるかもしれないですね。昔、特定の人をストーカーして書き込みしあう裏サイトがあったらしいですよ。『今日ののりちゃん』とか言っつて、交代で写真を撮ってきたりしてるのかも」

「他人の不幸は蜜の味つてやつか。あんな真面目そうな女の子が影でそんなことしてるとしたら、シヨックだな」

「裏表ある女の人つて結構いますよ」

「愛ちゃんたちも陰で俺の悪口言ってるのか」

若佐はあわてたように手を振った。

「やめてくださいよ。私、そういうの大っきらいなんです」

「おっ、出てきたぞ」

ドアが開き、暗い顔をした高原がのそりと姿を現した。

女はデジカメを取り出し、入り口のほうに向けている。

「バカだな。そんな遠くから撮れるかよ」

安澤は呆れたようにつぶやいた。

上

「ありやあ、ほんとに尾行ごっこかもしれないなあ。それともストーカーごっこか。おっと、愛ちゃん、あの女の写真撮ってるか？」

「ぼっちりですよ。昴さんに送信しときました」

若佐が携帯電話を掲げてみせる。

安澤は頭をかいた。

「さすがだなあ。そういうとこだけは若いもんにはかなわんわ」

「だけどちよつと遠いかもしれないですね。ヤッさん、ここから見ただけでも、似顔絵、描けますか？」

「あたりきよ。全部ここに入ってる」

安澤は頭をつついてみせた。

「一度見た顔は忘れねえよ。目、鼻、口、輪郭、特徴……何十何百っていうパーツが頭に入ってるなげや、モニタージュ代わりの似顔絵なんて描けねえ」

「さっすがヤッさん。私、もう一度会つても、見分けられるか自信ないです」

「人の顔を覚える。面取りは探偵の基本だぜ。なまじ文明の利器に頼りすぎるからいけねえんだ。必死になりやなんだつて覚えられる」

「そんなもんですかねえ。あつ、昴さんから返信が返ってきました」

若佐が携帯の画面を覗きこんだ。

「うそ、信じられない！」

「どうした」

「あの人……高原さんの元いた会社の社員らしいです！」

「なんだって」

安澤はくわえた煙草を落としそうになった。

「こないだの潜入操作のとき、昴さんが見たって……ええと、総務部、秋野萌枝^{もえ}。派遣社員

……」

「愛ちゃん、ちょっとここで待ってる」

「どうするんですか？」

「しばらく後を尾けてみる」

「私も行きます」

「何言ってる。お前と俺が一緒に行ったら目立ってしょうがないだろうが」

安澤が叱りつけた。

「いったん向こうに回って車を停めるからな。何かあったら連絡する。ちゃんと待機してるんだぞ」

「……分かりました」

若佐は名残惜しそうにうなずき、振り返って女の顔を記憶に納めた。

8

上

秋野萌枝は、肩で息をしながら、高原の後を追っていた。

のそのそと歩いているようで、高原は結構なスピードだ。男性と女性では、身長差もある。前の角を曲がった高原を追って、小走りに角へやってきた秋野は、男の人と鉢合わせになった。

「すみません」

頭を下げて通りぬけようとすると、男は行く手を遮るように手を広げた。

がたいのいい中年男だ。

胃の辺りがきゅっと縮み上がった。

「通してください」

「そんなにいい被写体かな、あの男は」

秋野はぎくりとして男の顔を見た。

炎

からかっている風でもないし、怒っている様子もない。探るような目つきだけが鋭くこちらを見つめている。

「写真を撮るときは、相手の了解をもらったほうがいいと思いますかね」

「何言ってるんですか。警察呼びますよ」

秋野は身構えながら、携帯電話に手を伸ばした。

「それなら呼ぶまでもありません」

男がポケットから覗かせた黒皮の手帳に、秋野は凍りついた。

「ちよつとお話を伺えませんかネエ」

「わ、私は何も……」

「そんなに焦らないで。何も逮捕しようってわけじゃないんだから。署までご同行……いや、ちよつと近くの喫茶店でもいい。秋野さんが知ってるところで、話を聞かせてもらえませんか」

名前まで知られているとは。

事を荒立てるのは嫌だった。

人の多い喫茶店なら、どうということもないだろう。秋野はおとなく後についていった。刑事は、高原がストーカー被害にあっているらしいので調査していたと話した。

上

「ストーカー、ですか……」

秋野はつぶやいた。

「この間も自宅近くで撮られた写真がネットにあがってましたもんね」

「さつき撮った写真も、ネットにあげるつもりだったんじゃないかね」

「違います。望遠機能で、高原さんかどうか確かめようとしただけで」

「写真は撮ってない？　じゃあ、なんで後を尾けまわしてたんですか」

「私はただ……少しでも高原さんのことが心配で……」

「心配？……」

男は意外そうな顔になった。

ガチガチになっている秋野の緊張をほぐそうとでも思ったのか、ふところからタバコを取りだして勧めてみせる。

秋野が首を横に振ると、自分の口にくわえて、うまそうに煙をふかした。

「高原さんと親しかったの？」

「親しいってほどじゃないですけど、パソコンのことをいろいろ教わったりしました。ネットでは少し口が悪かったかもしれないけど、本当はとても親切な人なんです。それなのに、みんなあんなてのひら返したみたい……」

炎

会社に派遣されてまもない頃、秋野はサーバ上の重要書類を誤って削除してしまったことがあった。

翌朝の会議で使うからと印刷を頼まれていたのだが、不要になった古い文書と間違えて消してしまったのだ。疲れてぼんやりしていたのかもしれない。仕事が重なって日頃の退社時間をとうに過ぎていた。

今からでは、作り直す時間もない。そもそも、印刷を頼んだ社員は、すでに帰ってしまったている。

やってきて早々こんな失態を犯すとはと、秋野は泣きたい気分になった。

ぐうぜん残業していた高原が声をかけてくれなければ、ただ呆然としていただけだったかもしれない。消してしまったファイルを復旧できるかもしれないと聞いて、地獄で仏を見つけた気持ちになった。

サーバの管理者と交渉し、専用のソフトを探し、ファイルを見つけだすころには、深夜になっていた。

自分の仕事もあつただろうにと秋野は恐縮したが、高原は嫌な顔ひとつ見せず、書類のコピーまで手伝ってくれた。

会社では無口で人付き合いの悪かった高原は、そうした優しさも持ち合わせた人間だった

のだ。

秋野がネットの件を知ったのは、高原の辞職が決まってからのことだった。

高原が書いていたというブログを読み、自分が知っている高原と違ってびっくりした。

たしかにキワドイことも書いてあつたが、面白い。ここまでされるいわれはないはずだと思つた。高原は面子ばかりか仕事までなくしたのだ。

それよりも、正義面をして、他人の不幸をあざける人々に腹が立った。

匿名性を守られて、自分は火の粉がかからないと思ひこんでいる。

その中には、こうなる前、高原のブログを面白がつて読んでいた人もいるに違いない。

憤りを感じながら掲示板やあちこちのブログを見ているうち、秋野は気になる書き込みを見つけたのだつた。

人の不幸がそんなに楽しいか？

そんなに言うなら死んでやるよ。お前ら一生後悔しろ。

モニタの前で、心臓がきゅつと縮むような思いがした。

「そりゃ穏やかじゃないなあ。だが、売り言葉に買い言葉つて奴じゃないかな」

「本人の書き込みじゃないかもしれません。でも、なんだか心配になってしまっ……」

アパートから出てきた高原を見て、ほっとすると同時にまた不安になった。まるで死んだような目をしている。これから死に場所を探していくのではないか。ふらふらと線路にでも飛び込んでしまうのではないかと気を揉んだ。

もしあのまま高原が死んでしまったら、悪口を書き込んだ人々は後悔するだろうか。

それとも、それさえ笑いの種にしまうのか。

人はそれほどの悪意を、恨みもない他人に対して抱けるものなのか。

秋野はつぶやいた。

「私、許せません。自分の名前は明かささないで、人のプライベートを笑いにするなんて……卑怯だと思いませんか」

「そうさな。まあ、高原さんも偽名を使ってたが」

「でも、決まったハンドルネームで書きこんでいたでしょう。高原さんの悪口を書いている人達は、ほとんど『名無しさん』ですよ」

秋野は唇を噛みしめた。

「会社にも同情している人たちはいるんです。なんとかできないかって、話し合っているんですけど、ネットで一度出回った情報は消せないって、浅田さんも……」

「浅田さん？」

「あつ、すいません、職場のシステム管理者です。パソコンに詳しいんで、いろいろ相談してたんですよ。高原さんのこと、なんとかできないかって。そうしたら、消すことはできないから、良い情報を流したらどうかってアドバイスしてくれました」

「なるほどね……」

秋野はおそるおそる尋ねた。

「刑事さん。高原さんがストーカー被害にあってるって本当ですか？」

「まだ調査中で、くわしくは話せないけどね」

「刑事さんがついてるんだったら、大丈夫ですよ。高原さん、自殺したりしないですよ」

秋野が心配になって目を覗きこむと、男は真顔になっとうなずいた。

「ああ、そんなことはさせないよ」

男の言葉は、力強く聞こえた。

男は、携帯電話の番号を書いて手渡した。

「もし何か気づいたことがあったら連絡ください。それと、これからは、高原さんの後をこそこそつけまわさないこと。あなただってストーカーに狙われる可能性もあるんだから。そ

ういうのは私ら専門家に任せておけばいいんだよ」
「分かりました。どうかよろしくお願いします」
秋野は神妙に頭を下げた。

9

二人の報告を受けた昴は愉快げに笑った。

「さすが元刑事ね。名刺入れで本物の警察だと思いきませるなんて」

「中を見せてくれて言われたらどうしようかと冷や冷やしたけどな」

「今度は本物を用意しておきましょう。だけど、振り出しに戻ってしまったわね。秋野さんは、管理者の浅田通晴が高原さんに同情していると云っていたのね？」

「そんなニュアンスに聞こえたがね」

「私が話した時は、ずいぶんクールに感じたわ」

昴は考えこみ、ピンク色の爪で唇をつついた。

昴がシステム会社の営業を偽って接触した時、浅田は高原がああなったのは自業自得だと云っていた。相談してきた秋野に、話を合わせただけか。あるいは、少しは同情しているの

か。

システム管理者の協力があれば、社内の捜査はやりやすくなる。

「犯人は社内の人なんでしょうか？」

若佐が首をかしげた。

「さあ。なんともいえないわね。アクセス・ログを見た限り、高原以外の人間も社内からアクセスしている。でも、高原本人以外のアクセスが増えたのは、事件が大きくなった後ね」

「どうして他の人がアクセスしたって分かるんですか？」

「ユーザ・エージェント。アクセス・ログには、ホームページを閲覧したブラウザの種類が記録されるの。高原はFirefoxを使って、Internet ExplorerやOperaでのアクセスが少しだけ混じってる。実際に何人の人間がアクセスしたかは、社内のアクセス・ログを確認しないと分からないけど」

「ブログの記事は？」

安澤が尋ねた。

「今のところ参考になるものはないわ。漏洩の起きた二週間だけでも、右翼団体の罵倒、政治家の愛人スキャンダル、部落民との闘争問題、有名ブログの批判、サポートセンタの対応の悪さ、精神障害と犯罪の相関について……センシティブな問題ばかり取り上げてる。敵は

大勢作りそうだけど、決定打になるものはない」

昴は、安澤の描いた似顔絵を取り上げた。

「気になるのはこの女ね。どこかで見た気がする。あの会社の社員ではないし……」

「この近所に住んでるとか？」

「いいえ、直接じゃなくて、テレビか雑誌かネットか……ねえ、来生君、この人見たことない？」

サーバの前に座っていた来生が振り返った。

「さあ。そういうのは、古谷ふるやがくわしいんじゃないですかね」

「同感よ。残念ながら、外出中だけど」

「古谷さんが外出なんて、珍しいですね」

若佐が驚いたように言った。

古谷は、入社してから退社するまでの間、パソコンの前からまるで根が生えたように動かないのだ。

「秋葉原に買出しとか言ってたわ」

「そんなこと言つて、またメイド撮影会にでも顔出してるんじゃないですかあ」

言いながら、古谷の席の端末を覗きこんだ若佐は、うえ、と顔をしかめた。

「ちょっと、これ、セクハラじゃないですか」

画像を次々表示するタイプのスクリーンサーバーには、胸をはだけた着物姿の女性が表示されているところだった。

あら、と言つて、昴が画面を覗きこむ。

「古谷さんつて、ちょっとどうかと思います。いつも仕事に変なサイトばかり見るし……昴さん、優しすぎるんです。普通の会社だったらクビですよ、クビ。一度ガツンと……ね、しゃちよー、聞いてます？」

昴——社長は聞いていなかった。

真剣な顔をしてじつと女性の半裸を見つめている。

「昴さん？」

昴は不意に机を叩いてアツと叫んだ。

「どうしたんですか？」

「そうだ、ここで見たのよ。古谷君のスクリーンサーバーで」

「えっ？ まさかエロ画像つてわけじゃないだろ」

安澤が驚いたように聞き返したが、昴は首を横に振った。

「その『まさか』よ。大至急、古谷君を呼びもどして」

「はい」

来生が受話器を取り上げ、安澤は腕組みしてうむとうなった。

「人は見かけによらねえなあ。人を見る目は確かだと思ってたんだが、俺の勘も鈍ったのかね、うーん……」

「ヤッさん、綺麗な人を見るときは色眼鏡がかかっているんじゃないですか？」

「あんな、愛ちゃん、こう見えても俺はずっと硬派で通ってるんだぞ。中国窃盗団の美人ボスを泣き落としで完落ちさせて、惚れられちゃまった時もだな……」

安澤がいいわけとも自慢話ともつかぬ話を垂れているうちに、来生は電話を終えた。

「つながりません。圏外みたいです」

「まったくもう、なにやってるのかしら。仕方ないわね」

昴は腰を下ろしてスクリーンセーバのパスワードを解除すると、三人の顔をかわるがわる見た。

「誰か、探してくれる？」

「そう言われても、俺はパソコン使えないからなあ」

安澤は頭をかき、

「わたし、絶対嫌ですから！」

若佐は汚らわしいという風に身震いした。

「……俺ってことですね」

来生がしぶしぶ立ち上がり、古谷のパソコンの前に腰を下ろす。

ファイルが見つかったのは、それから約二十分後のことだった。

「プロじゃねえな」

画像を見た安澤が顎をなでた。

「化粧してないし、ポーズや写真の撮り方がちょっと……や、仕事で見ることがあるんだよ。あくまで仕事で」

軽蔑のまなざしを送る若佐に、言い訳がましく弁解する。

「そうすると、チャット嬢とか、ネットアイドルとかですかね」

来生に問いかけられて、昴は何か思い立ったように大股に自分の席へ戻った。

「それ、私の方に送ってくれる？」

「古谷さんのメール、使っちゃまずいでしょ。サーバにあげときました」

「ありがと」

「どうするんですか？」

若佐が興味しんしんといった調子で昴に尋ねた。

「この写真の出所を調べたら何か分かるかもしれないわ。ホームページか、ウィニーか……」

「えっ、そんなこと分かるんですか？ ウィニーって匿名のネットワークなんでしょう？」
ファイル交換ソフトのウィニーが普及した理由のひとつに、赤の他人と、お互い正体が秘密のままでファイルを交換できるからということがあげられる。

誰からファイルをもらい、誰にファイルをあげたかすら、ユーザは意識しない。
そうでなければ、違法ファイルだのヌード画像だの交換できたものではない。

だが、昴はウインクして言った。

「表向きはね」

画像付きのメールがあるアドレスに添付して送り、しばらくして、電話を取り上げる。

「阿部さん、久しぶり。早川です」

「どうも、元気そうだね。どう、会社の方は」

「おかげさまでぼちぼちね。さっきメールを送ったんだけど、あなたの会社で、ウィニーのネットワークを観測してたでしょ。それで送った写真が出回ってないかちょっと調べてもらえないかと思って」

「見たよ。ホントは企業秘密なんだけどね……」

「野暮なこと言わないの。二年前に大事にならなかったのは誰のおかげ？」

阿部が、電話の向こうで笑い声を立てた。

「まったく、君にはかなわないな。実を言うとさつき確認してみた。今も数百のノードで公開状態になってる。なんの画像なの？」

「さあ、それは今調べてるところよ。漏洩元の端末は分かる？」

「それが、最初に公開されたのはずいぶん前みたいなんだ。うちじゃ一ヶ月以上前のデータは取ってない」

「そう……」

昴がため息をつくとき、阿部がつけ加えた。

「待って、いいニュースがある。実は、ガンマのやつが、だいぶ長いことウィニー・ネットワークの観察を続けてるらしいんだ。メールを転送しておいた」

「手回しがいいわね、ありがとう」

「どういたしまして。こっちの近くに来ることがあったら連絡してくれよ。夕飯でも一緒にどうぞ」

「そっちもね。じゃあ」

電話を切ったところで、返信のメールがポップアップした。

PGPで暗号化されていたが、ひどく簡潔な内容だった。

明日、例のところだ。

一口さね。

g@mma

「例のところ、か……懐かしいわね」

昴はつぶやき、デスクに並べられたディスプレイの間から声をかけた。

「来生君、悪いけど明日、出かけるわ。セミナーは一人で行ってくれる？」

「あれ、お出かけですか。どちらへ？」

「大昔の隠れ家よ」

昴は微笑み、メールに返事を出した。

10

昴がやってきたのは、渋谷のマンションの一角だった。

蔦が絡まる古びた2DKのマンションだが、駅にほど近い便利な場所だ。

狭い階段を上がり、四階までやってきて、昴は立ち止まった。

ドアの前には、子供みたいな字で張り紙が張られている。

「うえお見よ」

昴は、かかれた通り上を見る——ことはなかった。

代わりになにか宙を叩くような仕草をしてから、ドア脇の暗証番号パネルに手を伸ばす。

4・5・6・9。

ロックのカチャリと開く音がした。

パソコンのキーボードに並んだ平仮名、「う」、「え」、「お」、「よ」の部分には、

「4」、「5」、「6」、「9」の数字が書かれている。簡単な暗号だ。

畳敷きの室内には、ひよろりと痩せた男が座っていた。

ランニング・シャツ一枚だが、それで十分なほど室内は暑い。部屋の壁面に並べられたサ

ーバが、空調を上回る熱を吐きだしているのだ。

昴は上着を脱いだ。

「久しぶりだな、シゲ」

「あいかわらずここに寝泊まりしてるの、ガンマ」

昂は、相手に做ってハンドル・ネームで呼びかけた。
SIC.p@mmamaもそれぞれ学生時代に使っていたネット上の名前だ。

江田充つとむという本名を知らないわけではないが、かつてのハッカーのアジトで呼びあうには、このほうが自然に思える。

夏休みなど、ここにたくさんさんの連中がたむろしていたものだ。

ノートPCを持ちこんで、プログラムを書いたり、大学のレポートを仕上げたり、ゲームをしたり、昼寝したり、実験をしたり、雑談したり。

共同資金で借り上げた、都会のどまんなかの隠れ家。そこはハッカー達の交流の場であり、勉強部屋であり、根城だった。

時が過ぎ、ある者は研究者になり、ある者はサラリーマンに、ある者は経営者に、ある者は二ートになったが、アパートは今でもかつての仲間に開放されている。

冷蔵庫、流し、トイレ、布団。生活に必要な物は一通り揃っている。

「ここなら会社から近いし、家に帰るのは面倒だね」

「あなたらしいわね」

昂は笑い、サーバ群を振りかえる。

「また増えたんじゃない？」

上

「ああ、会社の払い下げを持ってきた。たくさんあっても困ることはないし」
ガンマは肩をすくめ、本題に移った。

「例の画像だが、三ヶ月ぐらい前からウイニーで出回ってたよ」

「やっぱり」

「いくつか分かったことがある。こっちへ来て」

ガンマは立ちあがって隣の部屋へ入っていった。

部屋の中は薄暗かった。

ガンマがスイッチを入れると、ブウンと低い音を立ててプロジェクターが起動し、壁に映像が投影された。

暗闇の中に光る無数の光点。

光点は細いチューブで結ばれ、その間を、もっと小さな赤や黄色や青の光が行き来している。それは神経細胞のように、あるいは衛星から見下ろした大都市のようにも見える。

「壮観ね……」

「ウイニー・ネットワークを可視化したものだ。欲望のネットワークさ」

赤がエロ画像、黄色が音楽、青が漏洩ファイル、白は未分類、と、ガンマは説明してみせる。

光のひとつひとつが、ノード——ウィニーが稼働中のコンピュータ端末だ。ここに設置されたサーバは、二四時間三六五日、各マシンに手持ちのファイルと周囲のノード情報を問合せ続けている。その結果、ほぼリアルタイムに日本中のウィニー・ネットワークを表示することができるのだ。

「匿名性が保たれていると勘違いして、似^エ非^セ紳士どもが本性を現す。面白いと思わないか、昂。日の当たらない闇の世界で、声にならない本音を眺めるのは」

「同感だけど、光も闇も本物よ。一方だけが本性ということはないわ」

「なるほど。まア俺にも光の側面はあるしな」

セキュリティ・エージェンシー代表取締役江田充は、プロジェクタに接続された端末のキーボードに手を滑らせた。

「現在、あの女性の漏洩画像を公開中のノードだ」

画面が変化した。

光の数は、五百ほどだろうか。

「時間を遡ってみようか」

光点が少しずつ減り始めた。

ある時点で急速に減少が速まり、七つほどになるとしばらくそのままになり、また減少を

始める。

最後に残された光の点は、たったひとつの端末だけだった。

運命の瞬間。ビッグバンの開始点。

「初めに光ありき。女の端末か、彼氏の端末、元彼の端末……どれかがウィニーのウイルスに感染した瞬間だ。誰かが故意に流したのじゃなきゃ、だが」

「アドレスは分かる？」

ガンマはIPアドレスとホスト名を表示させた。

「千葉の柏市ね……」

「心当たりが？」

「いいえ。女性の端末ではなさそうね」

昂は日付と時間、アドレスをメモした。

「もう一度、今度は時間順に再生してくれる？」

光が増えていき、七台になったところで昂はつぶやいた。

「しばらくこのままで、少ししてから急に増えたわよね？」

「さすが。実は後で説明しようと思ってた。今表示されているのは、日ごろ漏洩ファイルばかり集めてるマニアや名簿業者の端末だ。東京、埼玉、大阪、北海道……俺には毎度おなじ

みってやつさ」

ガンマは、ノードの上にIPアドレスを表示させてみせる。

「この時点ならまだ収拾できる可能性もあった」

「収拾？」

「消してくださいって個別にお願いするのさ。聞いてくれるかどうかは運次第。君なら強制的に削除に回るかもしれないが」

ガンマが昴を見上げて意味ありげにニヤリと笑った。

「もうそんな無茶はしないわよ。ところで、急に一般の人にも出回ったということは、何かあったのね。爆発的にふえる直前に」

「2ちゃんねるにでも晒されたんだろう……先月の初めあたりだ」

「見せてくれる？」

昴は身を乗りだして映像を見つめた。

増え始めた光点を見つめて、やつぱり、と、つぶやく。

「ありがとう、もういいわ」

「なにが分かったのか」

「まだはつきりしたわけじゃないけどね。ここ、また使わせてもらってもいい？」

「ああ。俺はいないかもしれないけど、検索だけならご自由に。他のP2Pのソフトの通信も見られる。俺が解析済みの奴はね」

「たいしたものね。助かるわ」

昴は部屋を出ていこうとし、ふと思いついたように尋ねた。

「ガンマ、あなた昔よくウイルスを集めてたわよね。ウィニーのウイルスは持つてる？」

「外のサーバにめぼしいデータは取ってある。ウイルスや漏洩画像なんかは一通り」

「ありがとう。何かの機会にお礼するわ」

別れはあっさりしたものだった。

ガンマは、じゃあ、と言ったきり、また端末に向き直って何か操作し始めた。

昴は和室のちゃぶ台に差し入れの菓子を置いてマンションを出た。

11

炎

上

外へ出た昴はポケットPCで高原のブログに接続した。
九日の記事はなかった。

もともと書いていなかったのか。高原が削除したのか。

立ち読みサンプル
はここまで